

最優秀賞

夏の使者からのメッセージ

静岡県 浜松学芸中学校一年 藤田 優泉

夏の訪れを感じるようになったある日の夕方、私は家の前の道で、蟻の群れに襲われている蟬の幼虫を見つけた。何年も土の中にいて、やっと地上に出てきた蟬と、夏のうちにできる限り食糧を集めておかなければならない蟻。どちらも生き残るために必死になっている。だが、私は弱り始めている蟬が気の毒になり、蟻を取り除いて家に連れ帰った。リビングの奥の和室を暗く静かにして蟬をカーテンに止まらせた。しばらくじっとした後、蟬はぐんぐんカーテンを上り、気に入った場所を見つけると再び動きを止めた。間もなく羽化が始まる。まず背中が割れて、中から白くて生っぽい感じの成虫が、ゆっくりゆっくり時間をかけて現れる。私はまるで自分も羽化しているかのように、体に力を込めて成り行きを見守った。静かだけれど、生命力あふれる神秘的な時間が流れていく。

「おお、すげえ。もうこんなに出てきたんだ。」と、弟が部屋に入ってきた頃には、蟬はほとんど姿を現し、のけぞるような格好になっていた。

「こんなの人間じゃ絶対無理だな。」
と言いながら弟は蟬がのけぞる姿をまねてみた。確かに人間なら、この体勢はきつい。落ちはしないかと本気でハラハラした。だが、そんな心配は不要であった。本当にさっきまで弱りかけていたのかと疑いたくなるほどの力強さで上体を起こすと、すっかり全身が現れ、ハッとするほど美しい生き物が誕生した。

「おめでどう。よく頑張ったね。」
と、思わずつぶやく。先程の蟻に襲われていた姿を思い出すと、本当に無事に羽化できて良かったと涙が出そうになった。それにしても美しい。薄いガラスの膜のような羽は、ため息が出るほどきれいな緑

色をしている。こんなにも美しい羽は、きっと命がけで羽化を成し遂げたことへの、神様からのご褒美なのかもしれない。私は時の経つのも忘れて蝉を見ていた。

翌朝、和室に入ってみると、昨夜の淡く儂い妖精のような姿から一転して、黒く艶やかで力強い夏の使者へと変わった蝉がいた。外へ放すため、カーテンから剥がそうとすると六本の足はガツチリつかまって抵抗する。生きている。私は生命の強さを感じた。小さいのにすごいな。与えられた命を無心に全力で生きている。何だかカッコいい。私は？私はどうだろう？無心に全力で頑張ったことって今までにあったかな？苦手だった運動会の組体操。中学受験。それから…。それから…？

手のひらに乗せた蝉を空に向けてポーンと放り上げると、ブルル…と羽を震わせて飛んで行った。先に地上に出た仲間達がシャワシャワと力の限りの声を上げている。

十二歳の私。これからまだまだ、全力で頑張らなければいけない場面に何度もぶつかるであろう。カーテンにポツンと残った蝉の抜け殻は「君も頑張れ」というメッセージのように思えた。

